

すぎなみソーシャルデザイン塾「地域みんなの学校作り」

06年10月18日 学習支援者 三井物産戦略研究所 新谷大輔

テーマ：ロールプレイ・ワークショップ「施設活用・制度等から考える」

はじめに

ロールプレイ・ワークショップについて

- ・ロールとは、役割をきめて、その役の立場になりきって課題に取り組む
- ・何を相手に求め、自分の立場なら何を持って、何を提供できるか、常に前向きな課題解決を考えていく
- ・意見の聞き方、出し方ですが、
相手の意見をまず聞いて、いきなり否定するのではなく相手の意見の中で汲み取れるところを見つけて、そこに自分の意見を加えていきましょう。
- ・課題解決が目標です。WHO・WHAT・HOW・WHEN・WHEREを考えていきましょう。

1 「施設活用・制度等から考える」をテーマに本日の課題です。

S小学校（生徒数1200人）を地域に開かれた学校にしていきます。学校をどのように使っていけば、開かれた学校になるのでしょうか？

1) この地域および学校の抱える課題は

- ・地域住民との接点が少ない、開かれた学校といわれても治安問題も
- ・画一的な授業しかない、といわれても、どんな授業をやればよいかわからない

この課題を解決するために、「つながり、接点」をキーワードにして解決策を考えましょう。

Aグループ：学校側（先生）

Bグループ：生徒の保護者

Cグループ：地域の住民

各グループでそれぞれの立場から解決策を探っていきますが、

2) 手がかりを得るために、全員で考えることから始めます。

- ・学校にはどんな施設がありますか？（全員で洗い出し）

校長室・職員室・相談室・保健室・事務室・主事室・給食室・教室・体育館・校庭・家庭

科室・PC室・図書館・音楽室・部活室・プール・花壇・ビオトープ・ウサギ、鳥小屋・
学童クラブ・防災倉庫・防災無線・用具倉庫・図工室・コピー、印刷室・理科教室・視聴
覚室・ランチルーム・会議室

これだけで30施設

- ・学校の他に使える施設はどんなものがありますか？

地域図書館・科学館・博物館・地域区民センター・介護施設・ケアホーム・老人ホーム・
障害者作業所・公園・川（遊歩道）・児童館・小学校区の地域子育てネットワーク（小学
校、児童館、保育園、幼稚園）・PTA・青少年育成会・NPO・専門学校（農園芸高
校等）・敬老会館（ゆうゆう館）・寺・神社・商店街・職場体験先の会社他・

これだけで21施設

学校内と周辺にこれだけの施設があることを認識してください。

3) 各グループで考えること・・・地域の接点づくりについて

- ・どんな学校であってほしいですか？

<学校側から>

授業（カリキュラム）の進捗状況と課題を知らせたいが

学習補助資料作成等のために、学校側から学校図書館、科学館や博物館スタッフ、
地域の人などに支援を求める声が強くなればよい。現状、地域の人たちを信用して
いいのか、自信がない。

食教育を授業の中に

朝食を食べてこない子どもが多い。授業に対する集中力が欠ける子どもが多い。昔
から食べていた食べ物を地域の人から学ぶ機会があればと考える。

躰は地域の人が

TVを見ながら食べる習慣が自然になってしまった。親子で食べる機会が少ないな
ら、地域の人と団欒をしながら一緒に食事をする。そのなかで躰を覚える機会を作
りたい。

顔見知りパトロール

シニアが、子どもと親しくなるツールとして学校の制度にする。学校側から呼びか
けることができたらい。

学校の施設を活用する

シニア向けのパソコンボランティアが学校に入り、先生の代わりに教える。

俳句・短歌・茶道などの伝統芸能を地域の人が教える。

学校給食の生ごみは、自分の学校内で堆肥化処理をする体制をつくる、生活環境教
育の一環として実践教育を図る。（練馬区など先駆事例多々あり）

まちの人が、学校に行く子どもたちの名前、特性を交流から知っている状態を作り出す仕組みを考えないといけない。一方、例えば小学校 2 年生活科「まち大好き」などの授業に地域の人に関われるように、学校側からの働きかけがあればよい。

< 生徒の保護者から >

学校は、親・保護者・地域の人の子の場である。教科に拘らずに支援の声を学校から出して欲しい。

部活の支援

地域にはいろいろな分野の専門家がいる筈。部活のサポーターで活動できるようにしたい。

学校の施設を、親・保護者が一定の条件で活用できるようにできないのか。

学校が地域に開かれる第一歩ではないか。

理科・数学の学習支援者を学校に入れる

理系授業の楽しさを含めて、授業を教えられる地域の人がいる。

学校セキュリティーに関して

地域の人、授業、課外授業等をサポートする仕組みを作れば、学校の安全は少し担保できるのではないか。

シニアと接する仕組みを作る

文化、体験等の授業にシニアを入れる工夫をして欲しい。

学校図書館を地域の人が使えるところにする、学校と地域の人との交流を書籍を通じて行う。

< 地域住民から >

学校、養護学校などにスターバックスを入れる。地域の人が集まり、学校の安全の確保ができるのではないか。思い切ったことを考える環境下にあることを考慮すべき時期がきている。

東田中学では、地域の人と防災訓練を行っている。中学生、先生、地域の人が一体化してお互いの顔が分かる関係となった。このようなことは各学校でできること。

学校サポーター、学校教育コーディネーターをもっと積極的に学校は活用して欲しい。また、学校と地域をどのように結び付けていくのかの工夫を、親も考え協力をしないと行けない。セキュリティーの要望を学校に伝えるだけでは解決しないものがあることを親は自覚することが肝心。

学校から見ると、親の意見は最も重い。しかし、学校に多くを求めてもできないことがあることを知らないといけない。地域の人を引っ張り込んで学校と議論をすればいい。地域の人、子どもに近づく努力をしないと。

学校は、自分たちが困っていることをオープンにすることを嫌がる傾向がある。だ

からこそ、学校に出入りする地域の人を増やす工夫をする必要がある。

「学校便り」「学校HP」などに学校が解決したいことを発信して欲しい。

学校の諸行事に参加することにより「つながり」が出来る。これが財産となる。

地域の人から見ると、校門をくぐることは若干の抵抗がある。課題授業・部活が盛んになれば参加しやすくなる。

子ども学びとは

先生から、親から、地域の人から得られた知識、智慧などを統合したものが、真の学びであると考え。統合された学力が必要だ。

- ・学校をどんな風に使えば、地域住民は学校とのかかわりは身近になりますか？

資料提供：杉並区の地域運営学校について

兵庫県西宮市の企業と子どもの環境学習

まちの課題はどのようなものも授業になる

地域ごみの捨て方教育（主宰は地域の人）の事例として

大人の無精を、子どもが学び、大人に気持ちを伝える授業の仕組みを作る。

学校の給食生ごみを自校内の園芸用の堆肥にするぐらいの環境教育授業が欲しい。

学校に入るサポーターを増やすために

学校側で免許制度を作る。（学校人材バンク）例えば、

防災・防犯・遊び・食教育・マナー・声かけなどに関わる人を養成し、ID免許制度を、学校独自で確立させる。サポーターの数と質が保たれるようにする。

学校図書館を地域の人に身近なものとする

中央図書館の団体向け図書貸出制度を学校図書館と地域の人に提供する。

そのために、

教科に必要様な図書資料を学校図書館や先生に確実に届ける学校図書スタッフを揃える。スタッフは、学校が必要とする学習図書資料を学校に届ける、学校で必要な人材を地域の人に呼びかける。学校図書館が学校側・地域の人との接点の場所にする。地域の人から見ると、校門をくぐることは若干の抵抗がある。課題授業・部活が盛んになれば参加しやすくなる。学校側からの呼びかけを恒常化する。

住民参加を促し、学校施設を長時間、（放課後から、21時ごろまで）子どもを預かる仕組みを作る。親・保護者以外の地域の人も参加し、安全に預かる諸機能を各自で負う。あくまでも学校が主体的に動けることにする。各種各様の人材は学校が選べるようにして、そのスタッフは地域の人が支援する。財源は一部、親保護者が負担するが住民が負担してもいいのではないか。地域の安全費用と考える。

このような地域学校ができないか。

防災、防犯で頼りになるのは中学生

地域の人が、いざという時に頼りになるのは中学生、近所の高校生である。お父さんは、会社に行き地域にはいない。普段から、町会・商店街の人は学校と付き合いを盛んにしておく。

中学の工作室の用具は使いきれているのだろうか

工作室に工具類が多種あるが、地域の人を参加させて工作授業を活性化する。

中学2年生の1週間職場体験について

職場体験プログラム作りには地域の人との関与は欠かせない。プログラム内容と質に差が学校間で生じている。商店街の人はもっと積極的に協力を。

職場体験プレ授業に親である企業人がゲストティーチャーに入る

生徒の親が、その学校のゲストティーチャーにならないで他の学校に行く。中学校相互間の協力体制を創ること。